

大学選びの新しい視点を 大学ポートレートに ～アクティブ・ラーニングを例として～

大学ポートレートで公表が予定されている情報は、基本的には大学ポートレートでなくても得られるものばかりだ。ここでしか得られないという観点で、大学の教育情報を捉えてみてはどうだろう。高校生が納得感を持って大学選びができる情報を、教育方法の特色を例に考えてみたい。

利便性は高まるが 情報価値は低い

これまでのページで見てきたように、2014年に本格稼働する大学ポートレートには、公表が義務化された9項目に対応する情報の他、授業料や経済的支援、認証評価結果など、さまざまな情報が盛り込まれる予定だ。

正確な情報が、フォーマットをそろえてデータベース化され、誰でもそこに自由にアクセスできることは、公表の形態も公表メディアも大学によって異なる中から、欲しい情報を探し求めている現状から見ると、利用者にとって利便性は格段に高まるだろう。

しかしながら、扱う情報が大学のウェブサイトや大学・学部案内を見れば出ている情報と大差ないなら、基本的には大学ポートレートにアクセスする必要はなく、その意味では大学ポートレートの情報そのものの価値は高くない。

さらに、大学ポートレートの情報は、その活用方法が利用者に委ねられている。構築の目的として「大学選択に活用」を謳ってはいても、「この項目を大学選びにこう使ってほしい」という意図は示されていない。ポートレートという名称が示すとおり、あく

までも大学の姿をデータベース化したものにすぎない。

したがって、高校生が大学ポートレートにアクセスしても、豊富な情報の中で、何に注目したらよいかにとまどうだろう。大学を選ぶ従来の視点を変えることなく、通学に便利な自宅に近い大学や名前を知っている大学のページをざっと見ただけで終わるかもしれない。

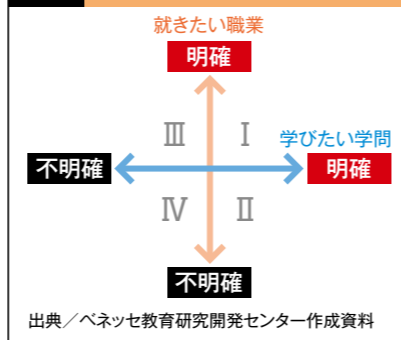
どんな力が身に付くかで 大学を選ぶということ

Between編集部は、高校生が納得感のある大学選びができるよう、大学ポートレートにこれまでとは違う情報を盛り込むことを提案したい。

納得感のある大学選びとは、その大学のことをよく理解し、「ここならやりたいことが実現できる」という共感を持って選択することだ。やりたいことが具体的に定まらない高校生でも、少なくとも、この大学に進めば自分はきっと成長できるにちがいないという期待感を持って選択することである。

志望校を検討するとき、学びたい学部・学科・専攻があるか、関心のあるテーマを研究している研究室があるかという、学びの分野に着眼することが

図表1 大学進学における高校生の4類型



重要であることは言うまでもない。

それと同時に、あるいはむしろそうしたこと以上に目を向けてほしいのが、どんな学びの方法によってどんな力が得られるかということだ。

とりわけ重視してほしいのが、問題発見能力や主体的に学び行動できる力など、社会に出たときに必要な能力や態度を育成しようとしている大学かどうかである。

高校生の大学選びに関する志向を、「学びたい学問があるか」と「就きたい職業があるか」という2軸でマトリクスに示してみる(図表1)。

学びたい分野や就きたい職業が明確なI～IIIの領域に比べ、IVの領域は、学問にそれほど興味があるわけでもなければ、将来のこともあまり考えておらず、職業や実社会と結び付けて大学や専門分野を選ぶことが難しい。実は

この領域にいる高校生がボリュームゾーンだ。この領域の高校生には、特に、一定の専門性をベースにしつつ、社会に出るための準備をきちんとさせてくれる大学かどうかという視点が有効だろう。

I～IIIの領域の高校生には、研究室の活動や実績、キャリア支援、資格取得のサポート体制など、従来提供されている情報もニーズはあるだろう。しかし、先を見通せないこの時代においては、高度な専門性や資格もさることながら、自分で考えて主体的に行動でき、他人と協力しながら課題を解決できる力が求められているのであり、社会で活躍できる力が身に付くかどうかという視点は、どの高校生にも等しく必要だ。

大学ポートレートには、学部・研究科の特色と、どのような専門知識・スキルが身に付くかということに加え、専門教育を通してどんな汎用的能力が身に付けられるのかについても、きちんとわかるように公開されることを望みたい。それが大学の教育力の実像を示すものだからだ。教育の特色が裏付けない飾り立てた文章で示されたり、理念や思いばかりが抽象的に述べられていたりするのはなく、高校生や保護者に理解しやすい形で示されていなければ、大学選択に活用できる情報公表とは言えない。

教育力の例としての アクティブ・ラーニング

教育方法の特色を示す例として、アクティブ・ラーニングの情報を大学ポートレートに組み込むことを考えてみる。

アクティブ・ラーニングは能動的な学習によって問題発見・課題解決力を養う方法として、多くの大学が取り入

図表2 アクティブ・ラーニングの実施情報例

大学・学部	アクティブ・ラーニング実施					特長
	グループ学習	ディベート	プレゼンテーション	フィールドワーク	ディスカッション	
A大学P学部	○	○		◎		
B大学Q学部	○		○		○	
C大学R学部	○	○			○	
D大学S学部	なし	なし	なし	なし	なし	

A大学P学部	アクティブ・ラーニング実施					特長
	グループ学習	ディベート	プレゼンテーション	フィールドワーク	ディスカッション	
1年次	選択 割合:○○ 頻度:●●	選択 割合:○○ 頻度:●●		必須 割合:○○ 頻度:●●		
2年次						
3年次						
4年次						

れている。主体性やコミュニケーション力、協調性などの育成に効果があると考えられているからである。

高校までの学習から、大学での主体的な学習へと学びの姿勢・考え方を切り替えるきっかけとしても有効であることが、ベネッセコーポレーションが大学・企業と協同で研究しているFuture Skills Projectの活動成果からもわかってきた。

アクティブ・ラーニングの機会の有無を、例えばグループ学習、ディベート、フィールドワークなどの領域ごとに整理する。このとき、特定の授業や研究室単位ではなく、大学としての教育プログラムの中に組み込んで設計されているかどうかのカギになるので、それぞれの学習方法が取り入れられている授業の割合や、必修か選択かといった情報とともに提供する。そのイメージを図表2に示した。大学を比較しながら調べていくと、学び方の違いが見えてくると思われる。

その情報を提示する際に重要なことは、単にアクティブ・ラーニングを行っているというデータを示すだけではなく、ディプロマ・ポリシー(DP)、カリキュラム・ポリシー(CP)との整合性を明示することである。例えば「DPであるコミュニケーション能力

を身に付けさせるために、1年次に必修でPBLを実施する」、「カリキュラム編成上、現実の社会事象と専門の理論・知識との関係性を理解させ、学ぶ意欲を高めるために、3年次にサービス・ラーニングを課す」といった具合に、関係情報を明記しておきたい。

高校生がこの情報に目を向け、大学選択の基準として活用できるようになるには、保護者や高校教員など、高校生本人をよく知る人のサポートが不可欠だ。ベネッセグループでは、納得感を持って大学を選ぶために、社会に出る準備ができる大学かどうかという視点が重要であること、大学を調べる観点として、アクティブ・ラーニングなどの各大学の学び方の情報に着目してほしいことを、高校生はもちろん、高校教員、保護者にもきちんと伝えていく。

どういう学び方をした人が社会でどんな活躍をしているかという情報やデータを大学ポートレートに経年的に蓄積していくことによって、将来的には志向性やタイプに即して、学び方から大学を検索できるようになるだろう。また、学習に対する姿勢や考え方が変わったか、成長の実感があるかなど、学生の自己評価情報とセットにして、この情報を提供することも有効と思われる。